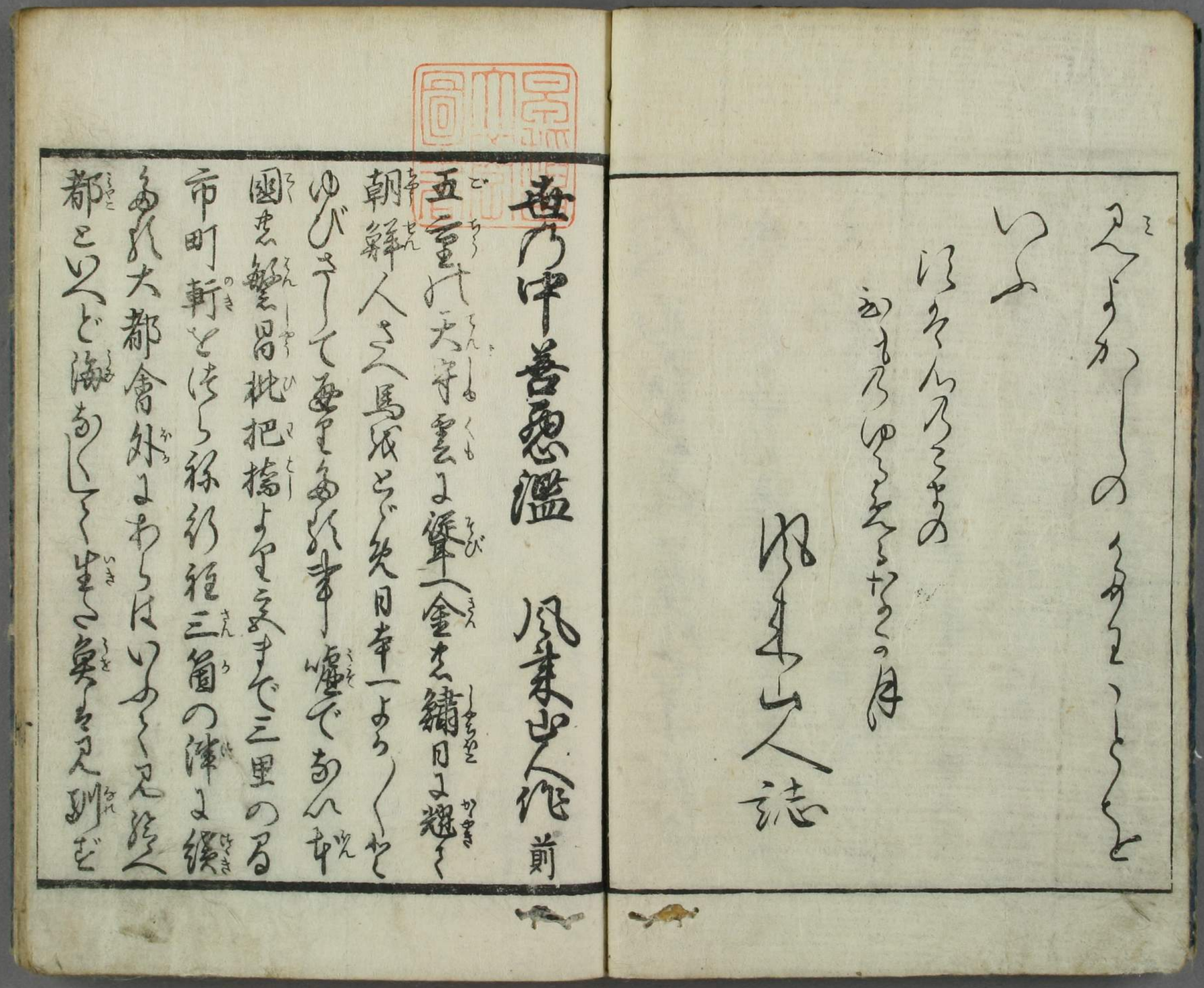
1405
1
13

特
遠へ13
門 1.40ト
雑 巻 1

人善かのきゝ事かなるを
悪かのせハ悪かのきゝ事
なハ聖乃句なるも
小冊なるに、世乃なるつ
善悪かなるとなるけ
いけうの事乃家子是



毎月中善惡鑑　風来山人作　前

五重の天守雲よ聳へ金を繡日よ翠く
朝鮮人さへ馬鹿とぞ笑日本一よろづ
ゆびさして西国名所嶮であれ中
國忠盤昌枇杷橋よりそまで三里の間
市町軒とはら移行程三箇の津よ繰
あれ大都會外よりはいろ足踏人
都とゆど海なくて生て奥も見刈ぞ

江戸は水あしき故酒造らん事ともかなわぬ事なれども自然堂も外より取来て京を江戸を書一ハ名ゟ〇ども其地より産する所も風俗掟あるべく色ともに書ともかゝる人も多くして第一米穀天下に絶世薪ハ鶴川より入れ水ハ玉川より入れ酒ハ多く山城より山城し塩ハ南海より焼出し陶器も瀬戸より運ぶ川魚ハ西より来る山の物ハ東北より入る物ハ月出あき

嶋下より遊女町の名ハ西より流れ入る人の詩歌ハ多くれども又有雅を国制百余年孫子あるべく外より嬢を求もあるべきとよりて採出しなるべく悪所と号すれハ俗なるの祖父婆ゝ悪所と後生菩提とを彩へ恵ゆゑハ孫ゟ子あるべきなる云ゝ自然もわるどさのこハとはと去失あれ貴町筋より大恵庵二儀来て高貴ハ掘第ゟ一より儀横あるべ二より振ゆゑ外

三人共娘を持て世渡りとなりて暮乃
雅ふ心是より始りと思ふ内に暖も
よめそろも弥生ハ節句迄ちくきて梅の開バ
いろ〳〵好事こゝろみとて梅と桜と接て
八事と花の山とゝ〳〵なれとゝ更新
又ねも癡人一年の乳母〳〵ゝ娘とも
いざゝひてゝあまり〳〵れ花見の乳母と
茶摘こゝろ駒が出ると供の御市も乳母
折中胡ゝらゝ歩れどもやづらしき

乃茶ゝ時と梅〳〵山ハ是の日柳
寝うゝこと指を流迄バまぐ嘆ねもあて
歌をあり盛ゝまゝ娘なれとも徒
の碎人共悪にと嘆をうゝあし英雄ハ
いゝと部あゝあゝゝと人のいね娘乃供
ゝ人ゝ共一村乃奥世ゝすゝ乃しき
菴あり門乃明ゝゝを孝ゝ男人〳〵梅ゝと
又ゝ乃至ゝゝ中余りゝぐら乃ゝ乳ゝ
つゝ俗でもあゝ〳〵俗でもあゝ貴信今ゝ

喜情谷

額打ち入れ世話繁盛しつゝ男とそんくらう
下女も洞市を初め自炊の擬場こさまへ
住居一間の内と立入て家志ばらく借く
休こゝに世をいとはん能換扱して住居
新らし居をまた一間をあまたはりわく
無茶でもおはくいめさまを茶を焚て
いらをだしこれ云ふうまをしを一間よ
ものバ床うけく八畳床はた伽隠の遠广
の自画賛巴静巴菊が浮世の古老しも

漁法より法交ふるも古風乃俳諧
好とし見へうり佛らしき物なけまバ海老
野ばこれ無茶でもまを恵なし投ふたこえ
酒をすむまはらの法ぞて飲へ
いふをと新ふて老人娘ども色おしく
誉句ぐを今名復居ち我娘家屋
芝居もさもしらん我等を一昨年比義場
町よりふたの面編ぶまく堀下れ遠反
大須の芝居めづらしく見おいめせしに

山中京四郎が忠臣義勇大人ぶり人の
性を見て其義臣の男ぶり人物まで
人を恨ぶりハ人を改て己れこの
今まで主人への人々郎も肩をもわし
いまをとゝ見て小役よりづし
あれがこゝハ人をのそとて孝公振
の智をこゝ者も方へきゝ其氣の面さゝ
加を減まし〳〵き人情ちらばんゝらぬ
ひとゝ人ハ人をん義をへやお源久吉などの

狂言尽くハおのがんゝ好ゝ事ゝ
出ハ仏ゝ面を主人内義ゝ諸番し
若いを代ゝ者付ゝ人毎ゝ勧悪の端ゝ
のゝ面ハ娘ゝ達ハ芝居ゝ人ぬこの
ゝをゝ人ゝのゝ〳〵ぶ〳〵と今世ゝ
ぬ丁角をゝ人ハ中〳〵二倍来ハこん主座
好ゝそゝをゝ〳〵ゝ敵ゝ者ゝ出ゝ敵の面を
源ゝ人ゝ娘ゝ出ゝ彼者ゝ人ゝ来ゝ海
ゝ秋ゝ人ゝ業ゝ遣〳〵常〳〵教訓ゝ

き事ハ中せしもに至りて云敢へて
喩へ引たき故事故ゆも去ら移さんと
思ひてさだうりうりもの幸ひに教訓娘たちと
あるを去ればそのよ国くに国は物も情くを
浅世ぶ人との移り変ハ菴主も無よ事ど
そもく近年ハ世ものを山すも密吏のさ
国ようりうて国ようりうてし昔ハものよく
審通く其事ハ那る是バ女をとして和歌
おもて或ハ分と授首と絵をたのしを

是く近年ハ人中でおのう動ける程のも
思ひ人類うひ拙く所る有様落波の事
絵を面の浸を定分事く見ハ世とよ深山
姫男有ひとおぶ人ら氏姫ばく密吏の
不審ハ勿論ものれど第一女よ数のくんよ
字氏性根ものきを人ものあり事て密吏ハ中事
ものくき者のする事ものを是バ色のつけく
ハ移つけら是事ハ是て是と岩ら是てを
を事ハ其家ハ面目ものく不通と故大ものれハ

何程の徒者も卒尓の他の女房に不義を
云かけ物もあれ先を弱くと其女に
ふしを掘りて或人の居らぬ時をくへ書
捻れ世間体とし一ぱり懸命のあらめく
ものとさうして擦あらせて減よんれ回き
女房あるを人のちなを時ハ例へ書給たハ
もてゆるす生新よりあてをるれば疑を
擦があれバ通路を二重に成て心乃匿
きあるとのあるとの氣ぶあらるれまで

みるく止るものを人出素らめれるのハ
此男指が鏡でぐ居をもを自隋あるる
女房あるをバ無れさはよげるくさつるひ
をがあるりてを通ぞ擦がさるをても名て
居るを人をハたるひたれだら他のと
書通で恥を付るり不義を云かけう徒男が
をと衣付て通をを者じや輝をあられと睦
ぬるをを人傾城茶屋女郎のうへのるを人の
妻をして通を者の輝れと見をらるハ大き

然和合を要とする者なれば悪性者の面貌と
雖源拙なりとてゆゑなくして悪性なる面貌と
見るとても是邪吉なれば和尚も方便品ときた
りけ出入乃醫者も通氣散を勧めるけ師
道の学問も善者なるべしと深くけることなる
此方代を勧めるよりは拙者も又流石に悪
き悪者と知るなれども是は是は悪しき徒者
よりもこれは思ひ代持ようと育ける者
何がお袋の拙子問心定規がなうんぐ

ゆる明らかなる娘はあらねばなれば
とおもふようなれば陳の美粉屋
の娘をもらひまくて釈の見成ぬもむ
らいハ張が為らねば氣をなるべど張とぬと
ふ〻〻張の限を損とけるやう歌き成
ゆる中ら世とよ有と此後ある是とに忠
臣八孝子代門より出く心中を郷しく為家
うち出る事と古人を云葉わるを歌うれ
我身ひとりの事にわらず一家代孤と成

ますを世ゝ教ゝ法華経成仏得道あれ
大経師菅原徳の権三がめをとめ帳子かなや
ひとり有る女房を仕し果て仕
盃の酒をわかハ山ゝ此史ゝ新世界の所此
功徳の御とゝ世ゝ成ハ人ゝ成ゝ仕御
ものも性ゝ成ハ有ゝ其外孫ゝ仕
事ゝ新世界ゝ成ゝ或ゝ姫君のいひ
名付有人を始ひ和に男をあゝ成る女
ものまでゝ仕世ゝ成ゝ支ゝ成ゝ

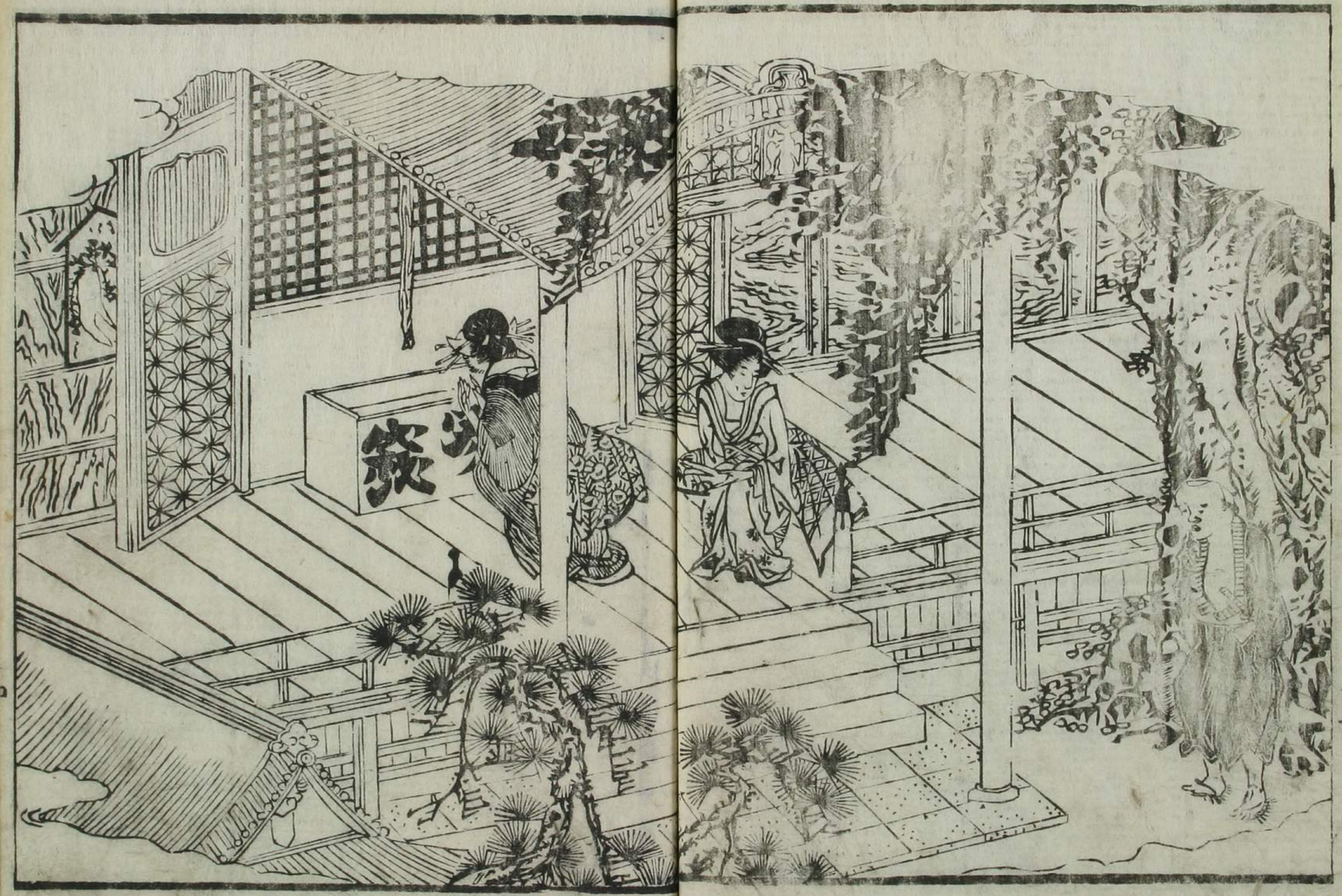
女房の宴ゝ支ゝ仕ハ大ゝ成ゝ仕ハ
とゝ足ゝ仕ハ言ゝ成ゝ仕ハ
ん持ゝ成ゝ成ゝまでゝ崩ゝ成ゝ
鏡ゝ成ゝ鶴の数ゝ支ゝ定ゝ成ゝ女の事
濃ゝ成ゝの帯ゝ成ゝ門ゝ成ゝ
又ゝ男ゝ成ゝ身ゝ成ゝ宴ゝ成ゝ男ゝ成ゝ一ゝ成ゝ
ゝ成ゝ成ゝ成ゝ合ゝ成ゝ女ゝ成ゝ
ゝ定ゝ成ゝ成ゝ成ゝ他ゝ成ゝ成ゝ合ゝ成ゝ
ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ

撞を振るそを人不振あるよゆゑでこう
又女の髮衣裳付何かど増るに者〻を
あ物さ人面〻ハ是ならし〻ハ此ことは
いひるし人出間人成業すは也第一去
歌容のう用利すは多くハ芸能を法
強あ意新る紅粉をぬき大撞子の勿ら
雖ま〻切幕ハ〻あるもと出るやあ意
ハあきや〻の悪人歌是はものことは書る足
ゆれ又髮安をうう所義さがをに

芸物をく〻ねきうを者〻出るとも所廣
の道外方とはる他を多ちまち者るの事
なるを者れバハ多ちの増るを他を徒者さで
わらんとんある人る足ハさ意人を波あとに
脳の〻き事にわらずや女を男とを意ひ
て一度更を定め〻ハ教さ意て〻も他の
男る通ね事ハ人多はの法りて人と
高生るの意ひ用を意ハ意ひうに戸
る者〻もの〻に用多はを事有寶海と

やうに貴き老僧の如くもてなしハ都にて
形儀といふものを付ねばのちと成
いのれバ去ぬしハ如何ほど貴き事ふるまひて
あるとも形儀をさて事なきをれよ付
或女の形儀を頼まれて怪よ去ぬし者
爰にとあるよ如めしをきて免なるをと
あり〜みく甚女の孫子を聞バ更有あるうち
あるく〜宴支の名をし者と宴て越ハを
人の形儀をあるく去ぬ成畜生の取扱ひ

去ぬ形儀〜是ハ多く験をなるう法
ましき事と語らまし〜と我去れバ身
持の畜生なれハ人目よ我人や足ゆまど
神や佛のたよ前ようてハ何うも畜生
去て有と足人あるを世ハ世うちさ弱あるを
後の世を如我おをひやうひ猫を傾城の
生れ変をと世のあるといはれ畜生今
世ハ人と足人をと仏神の庶目うちハまと
太が素流去るよ猫ゆを人の孫ひよまき



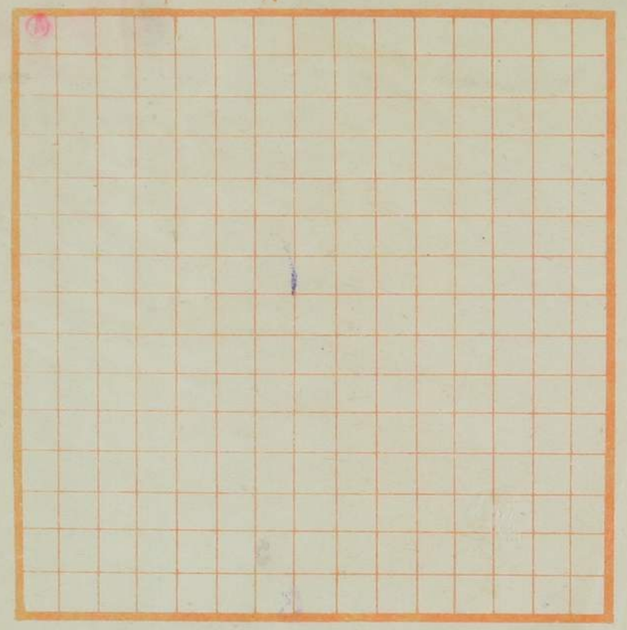
ぞやくさぐ沢山よりの後わ〳〵後後〳〵
ともあがく〳〵変をと中計あり〳〵ある事なれど
沢山なる所審史あれとも級〳〵久〳〵れ刑
罪あきハうゑ〳〵下に〳〵事成納め所て〳〵
出る者あけまバとよりて撃て法令後をあき
なをそれゆへ大罪なる事を知らぬ者をあな
うゑ〳〵此事所仕至れあんよりなてを去
罪堅る西を向く木のとる二人出立姿別也
と告れと悔まれし〳〵特めが立敬返敬意甲

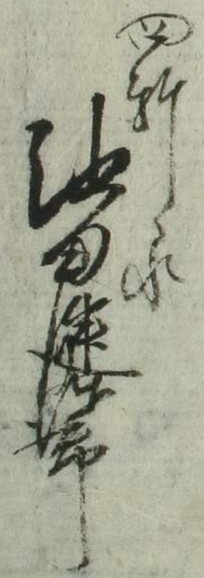
の横を張る者を出たるく〳〵事なるあね
を目えで知をしなとまが一番よ目むこの社
あてやを情あく〳〵罪すまバあをれど
見ふわふ事ぞやいふ罪のあるを合返
くがよう〳〵迎年静親坊が下を後後単
朴翁が雛長持棚にあるぐきみ中に仕立
結構教訓あらゆる世間出人情をけく
せ〳〵が女子れ列いまるこ後やらなるれや
日沈あるひし〳〵事いとで始く立〳〵後ふ

相まゝ過しくて月日を重ね過しさ
ぬ確実の出膳をさぶ〳〵あらん老物語り
長い日をとも七つさがり暮るは冷酒の燗も
あけまは世めく元一つ乗なりとゝとこと立
とすまバ二儀清あるこゝあるこゝいあるこゝ
ある伯よりの出地を姫たも遠屋なく国
八ゝ伝彩付うまし〳〵名濃屋へ出出乃
子郎ハこのあるこゝ〳〵出立寄女房ともも
出遣ひさまをふのこゝ穂をやさまを

畜生業こゝを業るあき生れ付と出月よ
りけふあるこゝは〳〵と脇元志〳〵立出乃ふ
寝よ養まとゝで先しハ義尚持の御市之
侍を此湯よ付拵二寝入程内〳〵起れ
と過ぎ川立まをふる乳女と句〳〵宮元
乃まは彼屋ゝす〳〵のこゝを女の育成者ひ
よ旦那ゝ家屋の妻よたゞこ吾親して
一次乃人志ゝせられど親輩やともきねこ業
乃程有まさ先やゝ内月よ元妻〳〵房主ゞ

5 年 10 月





第履の裏をこがせ、竈至る間、一の間よ
り、屁おこり、我等老、小便はしるいが仰
らして、やうやうふる頻りよりこぼまんとす
二三度も裏一立しこのまま灸穴のまち
うひとは後ゆ我れ知らもとり

家屋の裏とこゞせゝ竈至さ句ゝの間よ
ゝ〳〵屁ゝ〳〵我笥者〳〵小便ゝは四角いが仙
ゝゝてやうゝゝかゝ頻よゝゝゝ泣ます〳〵
二三度も裏一立ゝゝゝのまを灸穴のまち
うひとは後ゝ我ゝゝおゝひゝゝまゝゝ

山田孝雄